

〔「開館60周年記念 コレクションの歩み展Ⅰ」によせて〕

「寢覚物語絵巻」の春の庭と奏楽 ――拍板をめぐる

開館記念展を飾る華やかな絵画のひとつに、平安時代後期の「寢覚物語絵巻」があります。なかでもひととき印象に残るのが、桜咲く春の庭と室内の情景とを組み合わせて描く第1段です〔図1〕。

画面左側に吹き抜き屋台を片寄せて置き、緑色の畳が敷かれた室内の様子が描かれています。唐紙を貼った障子（襖）で分かれた二部屋があり、奥の部屋に、女性が二人、うずくまるように座っています。

左端の白い横顔をみせる女性が、この物語の主人公・寢覚の上、その右側に豊かな黒髪をみせているのが寢覚の上の縁者である斎宮とされています。このとき、世間では、寢覚の上は亡くなったと思われていたのですが、じつは、斎宮のもとに身を寄せてひっそりと暮らしていたのです。たしかにその居宅の開口部には御簾が降ろされ、さらに御簾の内側に青い帷をつけた几帳も隙間無く並べて立ててあります。室内の様子が、外から見えないように細心の注意を払っていたのでしょう。

ところが、画面中央下端に、妻戸が少し開いてできた空間があり、そこに烏帽子を被った男性の頭部がみえます。この男性は、寢

覚の上が、姉の夫と結ばれて生まれた息子の真砂です。そして、この時、外から吹き込んだ風が、妻戸に寄せて立てられていた几帳の帷をめくりあげ、真砂は、亡くなったはずの母が生きていることを知ります。こうして秘密がばかれるのです(1)。

このように室内は暗鬱な気分にあふたされていますが、それと対照的なのが画面右側の、このうえなく明るい春の庭の景色です。

この絵巻に使われているのは表面に雲母を塗った紙ですが、それに加え大小さまざまな金箔と銀箔が散られ、絵は金銀箔散らしの上に描かれます。これは、平安時代後期に、末法到来におびえた貴族が、救いを求めて財を蕩尽して作った装飾経の料紙装飾と共通します。

ここで、他の段に描かれる庭にも目を配れば、第2段では藤がからまる松、第3段では若葉が繁る梅が描かれています。松をのぞけば、どの木も、暗褐色の幹から細く優雅になる枝が分かれ出る、たおやかな姿です。幹には大きな緑色の苔がよりついています。

こうした木々も、長寛2年(1164)に平家一門が厳島社へ奉納した「平家納経」の「見宝塔品第十

一」紙背に描かれた柳や藤の絡まる松、そして梅や桜を連想させます。しばしば有名な「源氏物語絵巻」(徳川美術館ほか)と比較される「寢覚物語絵巻」ですが、それよりも、「平家納経」や「扇面法華経」(四天王寺ほか)などの装飾経のほうに、絵画表現と料紙装飾の両面で、近接するものです。

ふたたび、第1段の桜の庭に戻りましょう。庭には音楽を奏でる人々がいます。笙、横笛を吹く女性たちとともに、右手に緑色の板を重ねたものを握る人物がいます。この緑色のものについて〔図2〕、絵扇かといわれることもありましたが、これは拍板です。拍板とは、初唐ごろに生まれた楽器で、細長い板を数枚重ね、板の上部に開けた穴に革紐を通して繋いだものです。綴じた方を上にして持ち、板の束を開閉させて打ち鳴らします。

12世紀初めの宋代の楽書「陳旸楽書」によれば、拍板には大小二種あり、大は九枚、小は六枚の板を束ねて作られていたようです(2)。敦煌壁画〔図3〕に数多く描かれています。それを追うと、唐時代の中期から五代時代までが最盛期だったようです(3)。そのほか、敦煌だけでなく、中国各地の墓室の壁画〔図4・5〕や、宋代の名画「韓熙載夜宴図巻」(北京・故宫博物院蔵)など、拍板を描く中国の作品は大変多くあります。

いっぽう、日本でも高野山の「阿弥陀聖衆来迎図」や「当麻曼荼

羅縁起絵巻」(光明寺)などに拍板を鳴らしながら来迎する菩薩が描かれています。しかし、その形はいままでみてきたものとは違い、シャモジのように丸みを帯びた板を重ねたものです。

それに対して、この春の庭で使われているのは、中国の拍板とまったく同形です。ただ、残念なことに演奏しているところが描かれているわけではありません。いったいこの拍板、春の空にどんな音を響かせていたのでしょうか。

- (1) 澤田和人「寢覚物語絵巻についての一考察」大和文華館編『国宝寢覚物語絵巻 文芸と仏教信仰が織りなす美』2001年(のちに田中登ほか編著「寢覚物語欠巻部資料集成」風間書房〔2002年〕に収録)
- (2) 東洋音楽学会編『唐代の楽器 東洋音楽選書2』1979年2刷 音楽之友社
- (3) 馬林楠編『敦煌壁画楽史資料総録与研究』敦煌文物出版社 1991年

図版出典 図3『敦煌石窟芸術・莫高窟第154窟』江蘇美術出版社 1994年、図4・5『世界美術大全集・東洋編』5 小学館 1998年(泉万里)



図1 寢覚物語絵巻(第1段)



図2 奏楽部分

図3 敦煌莫高窟第154窟壁画
8~9世紀

図4 富平唐墓壁画 8~9世紀

図5 曲陽五代王処直墓壁浮彫
10世紀